

## 第45回 Kozoom28 「御綱祭りと、どろんこ行事を訪ねて」

清水健二

立春を過ぎると陽の光が明るく感じられ、今年は梅の開花も早くほのかな香りが漂ってきて清々しい如月を過ごすことができた。毎年2月11日の建国記念日に、奈良県桜井市に在る江包(えつつ)と大西の隣り合わせの集落が、「御綱祭りと、どろんこ行事」を開催している。この地は 私は何度か高津5期HPに書いているが、日本の記紀にも出てくる、日本で最も古い大神(おおみわ)神社があり、三輪山をご神体とする神山を間近に眺望できる古い農村地帯である。

江包に在る村の春日神社で男衆たちが藁で男綱を作り、大西では市杵島(いちきじま)神社で女綱を作って、各集落の境界にある素戔嗚(すさのう)神社へ担ぎ込み、重さ600Kgの藁で作った男性のシンボルと長さ40mに及ぶ尻尾をもち運ぶ。一方大西では5~6mの二つ折した舟形の女性のシンボルと100mに及ぶ尻尾をつけたものを、同じように男衆たちが担いで素戔嗚神社へ向かう。ここで合流し男綱と女綱を合体させ子孫繁栄と安産の祈願をするのである。



御綱祭り(男綱運び)



御綱祭り(男・女綱合体)



御綱・どろんこ祭り



御綱・どろんこ祭り

各集落では御綱練りをする前に、田圃に水を張ってここで男衆たちは相撲をとり、どろんこになって土を柔らかくし豊作の祈願をする。村人たちの応援をもらい行事は盛り上がることになる。二つの集落だけの伝統的な行事だけに、鄙びた田園の佇まいの中で執り行われるので、派手さはないが村人たちの和気あい合いの様子は笑いがある。因みにこの祭りは重要無形民俗文化財に指定されている。

一方、数年前に同じようなどろんこ祭りを、三重県の伊勢神宮の内宮近く、伊雑宮(いぞうのみや)を訪ねた時に私は初めて見た。ここは多くの観光客を集め見世物化されていてその壮観さに驚いた。日本三大御田植え祭り(千葉県の香取神社、大阪市の住吉大社とこの伊雑宮)の一つで、どろんこ祭りに引き続き行われる。上述の御綱祭りと同様、国の重要無形民俗文化財に指定されている。こちらは「御田植え祭り」なので毎年6月期に開催されている。笹葉のついた6~7mの竹の上に大きな団扇を取り付け、船の帆を想わせるもので男衆が泥田の中で何10人も半裸で奪い合う。その後小中学校の女生徒が華やかな早乙女衣装で田植えを行う祭事として、共に五穀豊穰と豊漁を祈願する催事である。

古代から農耕民族である日本は、漁業や林業と共に自然の恵みを頼りに日々の生活を営んできた。自然を敬い、自然の怒りに触れないよう祈りながら、季節の移ろいに合わせて農作業に勤しみ、漁師も海の幸を願いながら働き続けてきた。一方日々の働きの中に憩いを求め、隣人たちとの共助と楽しみの祭事を何世代に亘って継続してき



御田植え祭り(どろんこ行事)



御田植え祭り(早乙女達)



御田植え祭り(どろんこ行事)

たものである。明治時代になって、たかだか150年を経た現在では、考えられないほどの文明の急速な発展で、人々の暮らしを変えてしまった。特にこの50年は科学の進展に伴い経済の発展は著しく、人々の暮らしは豊かになった。その豊かさは人々に自然の恵みと脅威に対し祈りの心や畏敬の念を抱くことを失わせることになってきたように思う。近年、村に若者が少なくなり、祭事に参加することも薄れ、五穀豊穰や豊漁、子孫繁栄や安産祈願の心、更に隣人間の共助の喜びを分かち合う行事を疎んじるようになってしまった。伝統的な祭事等は生産的でないと、否定的な考えの人も多くなってきたようである。文明の乏しかった時代には、生きるために食を求めて働くことを第一にした。それだけに自然に対して敬虔な心で向かい合っていたし、生きる喜びを求めて憩いの時を作り大切に精神文化を築いてきた。それが結果として生活の知恵となり、その地域のアイデンティティー、つまり独自の催事や特産品を生むことになってきたと言えよう。

私は年齢と共に日本文化の素晴らしさを認識するようになってきた。林業から得られる建築材としての木造建築の美しさと耐久性、漁業からは豊富で生鮮な魚料理、農業からは主食として米、麦、餅を始めとして多様な発酵食品の数々が地域の特産品として味わえる時代になってきたと言える。日本列島が北から南まで、四季の美しさに触れながら暮らすことができ、絵画の分野では日本画の繊細な作品や浮世絵、工芸の分野では漆器や陶器、暮らしの中での着物や草木染、文芸として小説、和歌、俳句等があり、芸能の世界では歌舞伎を、精神的な領域では武道や茶道等々、各地の祭事等の伝統行事は枚挙にいとまのない多様な日本文化が先人達の努力で残され継承されてきていることを実感するようになった。例えば西欧文化に負けないユニークな遺産として「和食」などはユネスコ無形文化遺産になり、世界的にブームになっている。これら日本文化の源泉は自然の恵みへの敬愛と崇拜から得られたものである。近代社会にあっても、今回素朴な御綱祭りや、どろんこ行事、御田植え祭り等を観賞しながら、これからも人々の温かいふれあいのもとで継承し続けて欲しいと思った。

最近、祭事をエンターメント化し経済効果を狙って変質し、独自文化が文明と言う怪物に食われてきているように思えてならない。文明度の高い国は、経済力を武器に傲慢になり、自然の中で生かされてきたことを忘れ、自然を制御しかねない勢いである。地球温暖化の現象も文明国の経済一辺倒の姿勢から来る歪だろう。このまま放置すれば人類は自然の神の怒りに触れて自滅する恐れがある。古代の人々が抱いていたように自然に謙虚であり、敬虔な心を取り戻さなくてはならないと思う。祈願することで災いが無くなるわけではないが、「念ずれば通じる」と言う考えは、常に意識することで難を逃れる可能性は高いと私は経験的に信じている。

令和6年3月 記